

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第923号 平成27年4月30日

他力資本主義

湯川カナさんが書かれた「他力資本主義」が、話題を呼んでいます。

この本の面白いところは、「他力」と「資本主義」をくっつけたところですよ。

「他力」というのは、自分以外の力という事ですが、本来は仏教用語の一つで「阿弥陀如来の力」の事を意味しています。ですから「他力本願」というのは、他人の力を借りて幸せになるというような事ではなく、「阿弥陀如来の力」によって全ての人々が悟りを開き仏となる事を意味しています。

このように、「他力」という言葉は、「他人任せ」とか「他人の力を借りる」という事では本来ないのですが、しかし「自分の力」ではない事も確かですから、一般的には「他人の力」という意味で使われています。

一方「資本主義」というのは、辞書によれば「生産手段の私有制に基づき、私利私欲を追求して広く商品生産が一般的・支配的に行われる歴史的経済体制（学研「新世界大辞典」から）」とあり、この説明ではぴんと来ないのですが、経済という側面において優勝劣敗という競争原理が働いている社会といえは分りが良いでしょうか。

事業を起こす程の才覚がなければ一サラリーマンとして生活する他ありませんが、事業を起こして成功すれば大金持ちとなる可能性は有ります。もっとも、その事業に失敗すれば、青テントでホームレスとして生活するという事にもなりかねません。そういう競争社会が資本主義社会であり、その競争に勝つも負けるも本人次第、つまりは自己責任という事なのですが、その一方では、その競争は必ずしも平等の条件下で行われている訳ではありません。

親が高収入・高学歴な子どもは学力も高い傾向にあるという調査結果があるように、機会の平等という言葉はあっても、実際にはスタートラインは一緒ではありません。

「自己責任だから頑張れ」といわれても、いわれた方は「頑張っても結果は知れ



ているし、疲れるばかり」と感じている人達が少なくない中、「脱・自己責任」という言葉は、新鮮に響きます。

湯川氏は、「みな、それぞれが背負えるだけの荷物を背負って進みなさい。もしも途中で行き倒れたら、それは他の誰でもなく、あなた自身のせいです。」という世界を勝者として生き抜こうとするのは大変な事で、生きるのが楽しくなくなってしまう」と述べています。

確かに、何でも自己責任で片づけられたらたまったものではありません。実際問題として、自分の力だけでは出来ない事が沢山ありますし、むしろ、その方が多いように思います。

湯川氏は、頑張れば報われると信じて、勉強でも仕事でも進んで競争の中に身を置いて来たといいますが、そんな彼女は、24歳の時に体調を崩し、限界を感じ、仕事を辞めてスペインに渡ります。

スペインに渡った理由は「何か生き方を変えたい」という事だったようですが、実際にスペインに渡ると、最初は買い物すら出来なかったといえます。更に、出産という出来事もあり、自分1人では頑張ってもどうにもならない事が沢山あり、通り掛かりの人にでも助けを求めなければならないという経験をする中で、湯川氏の考え方は180度変わる事になります。それが、彼女のいう「他力資本主義宣言」という訳です。

湯川氏は、「他力資本主義」というのは、「他人を信じてみない？」という事であり「他人にゆだねてみない？」という事だと述べると共に、「そのぶん、自分を手放してみない？」という問いかけでもあります。

また、「ビジネスの世界はそんなに甘くないよ」という批判に対して、湯川氏は、彼女自身の経験から「自己責任論で語れる程、ビジネスの世界は甘くはないぜ」と反撃しています。逆に、沢山の人が力を出し合って、何か一つのもので出来るような形や仕組みが必要ではないかと述べています。

ところで、湯川氏は「脱・自己責任」は「無責任」とは違うと指摘しています。つまり、「脱・自己責任」というのは、自分の責任を何もかも放棄するという事ではなく、「権内の事はしっかり丁寧にやり尽くす。権外の場合は手放し、委ねる」という姿勢であると述べています。

このように、「脱・責任論」をベースにした社会、つまり「他力資本主義」の社会というのは、「頼り、頼られる」という関係を築く事であり、これは「今流行の言葉でいえば「共助・協働」の社会という事になります。

また、湯川氏は、「だれにでも、十分に、生きる知恵と力がある」事を信じるべきであり、「他力資本主義」を支えるのはそうした「他人」への信頼感だとしています。

湯川氏の著書を読んでいると、「他力資本主義」社会が成立するためには、「他人

から助けてもらおう」という一方的な関係に甘んじているのではダメで、「人と人をつなぐ橋渡し」を試みようとする勇気が必要なのだと感じます。

湯川氏は、あなたが勇気を奮って「おずおずと手を差し出すとき、必ず同時に、世界のどこかから、あなたに向かって手が差し伸べられます。」と述べていますが、その事を信じ切るのは、それこそ勇気が必要ではないかと感じます。

また、「他力資本主義」とは、「他の人が、その潜在可能性を十全に開花させれば、世界は豊かになる」と信じる事であり、そのために一番大切な事は、「他の人が、その潜在可能性を十全に開花させるのを邪魔しない事」だといいます。これもまた、人間には嫉妬心というものがあり、難しい事だと思います。

つまり、「他力資本主義」の社会に生きるという事は、「他者の力」に頼るという事だけではなく、「他者を生かす」という事でもあり、そういう事からすれば、ただ誰かに助けられて楽をしようというのではなく、他者と助け合って楽しく生きようという社会なのだのと、私なりに理解しているところです。

(塾頭：吉田 洋一)